

薬物処遇の在り方に関する検討会（第3回）議事概要

1 日時

令和4年11月4日（金）10：00から12：00まで

2 開催方法

Microsoft Teams による web 会議

3 出席者（五十音順。敬称略）

（構成員）上原憲太郎、岡崎重人、佐伯真由美、松本俊彦
（事務局）法務省保護局

4 議事次第

- ・開会
- ・報告等
 前回までの検討会の振り返り
- ・協議
 大麻事犯者に対するプログラムについて
- ・閉会

5 議事概要

冒頭、滝田観察課長から挨拶が行われ、続いて事務局等から、第1回及び第2回の議事概要について、説明が行われた。

大麻事犯者のプログラムの在り方について、保護局から論点の説明がなされた後、協議が実施されたところ、構成員の主な意見等は以下のとおり。

○ 大麻事犯者に対するプログラムの内容について

・施設で実施しているプログラムの内容について、対象者に調査したところ、引き金と欲求、再発を防ぐにはという回がためになったという人が多い。大麻事犯者へのプログラムについては、その部分の要素が多く取り組まれるイメージとなっており、全体的な構成として良いと思う。

・大麻に関する正確な情報をきちんと伝えるということについて、政府がまとめているからといって、その情報が必ずしも正確とは限らない。例えば、コロラド州の大麻使用により交通事故が増えているという情報が政府のホームページに記載されているが、最近では違うデータもある。そうしたことも認識しつつ正確な情報ということを考える必要がある。

・大麻を我慢してアルコールに移行する少年がいるが、それは避けてほしいと思っている。そのため、アルコールのリスクなどもワークブックに記載してほしい。

・若年者が多いということで、なりたい自分という未来志向の内容が入ることは良いと思う。

・大麻事犯者については、やめようという動機が低いから高めていこうというのは非常に大変なことであると思う。集団で生活していく中では、良くなる人、離れていく人など様々な人がいて、そうした人との関係性の中でそれぞれが気付いて、学んで、動機を高めていく。そして信頼する人ができていくということが非常に大切な部分である。5回のプログラムでは、信頼関係の構築までは難しいと思うからこそ、プログラム後には地域へつながるようにできれば良いと思う。

・全国には、マリファナアノニマス（MA）が5か所開かれている。Zoom開催もされているので、全国的に紹介することもできるのではないかと思う。

・ゲートウェイドラッグの意味する所をワークブックのコラムで書くことは良いと思うが、大麻事犯者は、ゲートウェイドラッグという言葉が周りから聞かされて敵意があると思うので、この言葉を使わずに説明するのが良いと思う。

・薬物検出検査について、覚醒剤に比べるとTHCは検出期間が非常に長く、1か月後でも反応が出る。周りの人が吸っていたと主張する者も想定され、使用剤とも関連し、検査結果の取扱いについて検討が必要であると思う。

○ プログラムの実施に当たっての留意点について

・プログラムを実施する上では、対象者の言い分について、正しいとか、間違っているとかをジャッジする必要はなく、情報についても、断定的な言い方をしないなど、対象者と議論しないという関わり方が重要。

・正確な情報を伝えるということについて、教科書の情報をそのまま真に受ける人の方が少ないと思うので、これが違うとか、あれは違うとか紛糾しないように、寛容に話ができるようコミュニケーションがとれると良いと思う。

・大麻事犯者にとっては、大麻を使用すること自体も本人の価値として持っていると考えられるため、使ってはいけないものだから使ってはいけないという話になると、心を開いて話ができなくなってしまうのではないかと思う。

○ プログラムの実施方法について

・集団を構成する上で重要なのは、薬物の種類というより、重症度の方だと思う。この点、初犯の大麻事犯者への対応は慎重な判断が必要になると思われる。

・若年者は、良くも悪くも逸脱的な行動をお互いの共通項としてつながるということはよくある。若年者を集団で処遇した場合、仲間・友達が増えるという点ではよいが、保護観察所をきっかけに薬物仲間が増えたということになるリスクはあると思う。

・大麻事犯者は少年が多いということもあり、個別で保護観察官が対応するというのも一つの方法であると思う。また、少年は、なかなか呼んでも来ないというところもあるため、保護観察所に来させるのではなく、対象者のもとに行くという方法も考えられるのではな

いか。

・グループか、個別かということではなく、対象者に対してどういうふうに向き合っているのかというところが動機付けに関わってくると思う。

・グループでの話を間違って受け止めていたり、グループで言いたいことがあっても言えなかったりすることもあるため、グループでプログラムを実施する際は、個別の面接も併せて実施するメリットがあると思う。